

らく鑛山經營の卓氏の管子輕重乙篇的企業法は、他の凡ゆる企業にも用いられたと推定して誤りないであろう。この推定を可能にしたことは古代政治史・社會史・經濟史の研究に巨大な貢獻をすると私は信ずる。とにかく氏のこの力作は、將來多くの批判に堪えつつ、常に有力な文獻として用いられるだろう。本書79頁には、明敏な上原氏によつて正しく利用されている。

秦に關する政治思想的論文を書いている栗原朋信氏は、「始皇帝の泰山封禪と秦の郊祀」なる題下に、次の如く論ずる。齊・秦など戰國諸王は、自らの皇祖を受命の君と信じ、國內の聖地たる泰山や雍などで郊祀と膺祭を行つた。始皇はその統一事業を受命祖靈の加護によると信じ、祭天告代式はむしろ秦の聖地雍で執行した。特に泰山で行わねばならぬ理由は何もない。史記を精讀しても、いわゆる始皇泰山封禪は單なる延命不死の祈願でしかなかつた。それは始皇が巡幸各地で行つた山祭と何ら異なるものではない。泰山を祭天告代の唯一の聖山としたのは、漢儒の思想に外ならぬ。漢は突起の王朝で、固有の聖地がないから、武帝の封禪では泰山が代用され、以後漢儒が學說として固定化した。武帝の泰山封禪では祭天告代も行つたが、むしろ延命不死の個人的祈願が中心秘儀だつた。しかし光武帝においては、個人的秘儀は全くすてられ、公開的な祭天儀禮のみが明記されている。つまり、「封禪」が完全に政治的儀禮と化したのである。

栗原氏は主として始皇の封禪史實を精究し、裏づけとして漢代における封禪の發展史をも述べたのである。しかし、何ゆえ始皇の泰山における延命不死祈願「のみ」が、漢代では「封禪」として論ぜられ、また武帝は何ゆえ「ことさらに」泰山を封禪の聖山としてえ

らんだかという疑問には、必ずしも明答は與えていない。私の知る限り、かつて福永光司氏は封禪—泰山—神僊—方士という關連圖式を作り、その説明を行つた（封禪説の形成、東方宗教）。福永氏によると、「泰山封禪は齊地出身の方士が權勢に近づく策謀であつた」とする。「かれらは一種の知識的呪術者だつたが、泰山が古くから有する政治性・信仰性を封禪と結合し、新しい王者としての秦漢の帝王を背景として、自らの權勢の場を作ろうとした。帝王も泰山も信仰も儒學も歴史も、すべてかれら方士の操る道具に過ぎない。」福永氏の論議にはやや獨斷がある。その點は栗原氏によつて是正されているが、福永氏のすぐれたアイデアは栗原氏によつて、かえつて殺されていと思う。

（一九五七年十二月十四日記・宇都宮清吉）

重松先生古稀記念九州大學東洋史論叢

九州大學東洋史研究室編

昭和三十二年六月 九州大學東洋史研究室發行

重松俊章先生年譜、著作目録並に古稀照相附

A5版 本文三四五頁 重松先生の憶い出一七

頁 非賣品

重松先生の古稀記念の九州大學東洋史論叢は寄贈を頂いて宮崎先生の所に來ているが、その紹介を書けという事であつた。最近着實な成果を擧げて居られる九大東洋史研究室の粹を集めたものであり、その上いち早く讀めるのは何よりの幸せと、がらにもなく、ついつかり引き受けたものの、ペンを取らうとしてはたと當惑、後悔先に立たずである。重松先生はじめ精密な論文十二篇、三四五頁に及び、どこまで理解出來たかしたたものでは無い。又内容の概要の略

記を連ねては無能にみえ、自分の狭い視野からかれこれつづけば、揚足取りになる。何れにしても本来無能、祝意を表するに止め、平凡な紹介を書くこととした。

九州大学の東洋史講座初代教授として就任された昭和三年から定年退官されるまで十七年にわたり、九大の東洋史研究者を育てあげられた九州大学名誉教授重松俊章先生が、昭和二十八年十一月古稀の壽を迎えられたのを記念して、先生に教えを受けた方たちが執筆された、誠に意義深い論叢である。一讀、どの論文も着實に史實に基き論證されていて、理論に走る事なく、謙虚にして確信に満ちている。しかも問題は重要な基本的問題に正面から肉迫し、ほり下げて行く、この事は非常な努力の結果に他ならない。その爲に文章が稍讀み難く、又冗長に感ぜられる所のあるも止むを得ないが非常に讀みごたえのある、氣もちのよい論叢である。かゝる後繼者を養成された先生に深く敬意を表すると共に、本論叢又先生の古稀を記念するにふさわしいものと、心から祝意を表する次第である。

巻頭は先生の論文「佛教東漸初期の教界とその東流の一大動機」でかざられている。傳説的なものを拂いのけ、中國佛教傳來初期の状況を史料的に明かにし、後半で、佛教東漸の動機を月支族の政變等、西域の政治的・民族的な歴史的條件から解明されている。中國佛教史を、西域諸地方と世界的力學的な關係において考察すべきと感じていたのであるが、教示を受ける所が多かつた。

江嶋壽雄氏、「遼東馬市における私市と所謂開原南關馬市」は、明代遼東に於ける馬の官市と私市の關係を明にし、官市の制約をつき破つて、馬市場外での私的交易が盛となり、その中心が開原南關馬市で、後それが女直に許可されたのが、後の開原南關馬市であるとい

う、馬市から互市場への發展へという、從來殆んど未開拓の分野を解明したものの。馬の問題、遼東における女直との交易等明朝のみならず、東アジアの歴史に重要な要素をなす問題の展開に期待される。岸田勉氏、「米元章論考」は繪畫史上注目される米芾(元章)について、最も優れた自由な主觀主義的創作家の一人であつたとの評價を與えている。唐から宋へ、中國近世史への轉換に當つて、新しい精神生活の展開を、藝術論の面からとらえている。中村治兵衛氏、「山東農村の觀音信仰」は、氏の實地調査に基き、歷城縣冷水溝莊の如意法門と稱する當會を中心に考察され、歷代宗教的秘密結社の研究に示唆を與えるものである。牧野修二氏、「大理國の城についての一考察」は、元朝の史料に基き、大理國の居住地名に多く附せられる城について、進んでその社會構造の研究へと追求された、新しい分野への研究である。

つづいて一聯の論文は(一聯といつたのは筆者の勝手な解釋であるが)、南北朝から唐へかけての、所謂中國中世史の社會經濟の重要な問題についての研究である。唐代研究の歴史が長いにかゝらず、不明の事が多く、又南北朝史と切り離してはならぬ事も痛感されていながらなか／＼つながらない事が多い。この中世と言われる時代は、土地を通じ、被支配者一人一人を直接國家が把握して、政治・財政・社會が構成されるという基本的な動きが、さまざまの形で消長をもちつつ、發展している。しかもそれに對立する反對勢力との有機的關係において、一直線にすゝまぬ點に問題の複雑さがある。さて越智重明氏、「劉裕政權と義熙土斷」は、南朝にあつて、土斷という國家權力の展開と豪族との關係、更にそれを通じて官僚貴族という新性格の發生について追求している。この問題は又唐朝まで、

形は變るがもち越される問題である。從來一應論じ盡くされたかの感のある北朝軍制に根氣よく迫つて、菊池英夫氏は、「北朝軍制に於ける所謂郷兵について」に於いて、郷兵の問題を分析し、北朝後期の常備軍が、鮮卑軍團の外に、漢人土着編戸丁男の義務兵徵兵制を建前としており、豪族の部曲等私兵を利用して、後者の擴充により中央權力の軍事的基礎の擴大をはかつて行つた事を論じて居る。府兵制への途、又在地豪族勢力が寄生官僚化する過程等、隋唐に至る中世史の流れにおいて問題がとらえられている。

草野靖氏、「唐律にみえる私賤民—奴婢・部曲についての一考察」は、從來の部曲・客女が上級賤民であるとの説を否定し、部曲は賤民身分でなく、封建的な主僕の道德觀念に支えられ規定された身分であつて、發生原因として、衣食の道を失つた孤幼の收養によるものであることを論證し、かゝる制度の成立は、國家政策上の事情によるものである事を論じている。單に賤民問題としてでなく、北周均田制との關連において考察された所に、新しい着眼があり、人民のあらゆる生活を把握し規定しようというこの時代の基本的なところを、前述菊池氏の論文との關連においてよく理解され、又日野開三郎教授「天寶以前に於ける唐の戸口統計に就いて」にも内面的なつながりをもつ。唐代の戸口統計が均田制、財政的に必要な限りのもので、そのまゝ信憑するに足りない事は、從來大ざつぱには認められてゐる所であるが、それを詳細に數字的に追求し、更に零細な史料を活用して論述されたもの。表面は統計數字であるが、それが問題となる所の基本的な、社會・政治史的な問題について論及され、示唆を受ける所亦大きい。私見をまじえれば、本論考による如く、時には正式戸口統計には、近い莫大な國家權力外の客戸が存在

する所の均田制社會の實態はどのようなものであつたのか、そもそも唐朝國家權力はどのようなものであつたかなど大きな問題をはらんでゐる。次に松永雅生氏「兩税法以前に於ける唐代の差科（其一）」は、「兩税法以前では、從來地方的な力役である雜徭を強制的に催すという説明を否定し、地方的・臨時的・戸等斟酌の賦課であつて、具体的には戸稅・資課等又供頓差科等であるとして、戸稅の考察で終り、以後は、續篇にまわされてゐる。唐代は前半と後半で制度・社會・經濟的に大轉換をしてゐるが、公文書では、同じ用語で書かれながら、内容が展開して變つてゐる爲混亂が多い。今なお正確には不分明な點の多いこの分野に、近時着實に一步々迫つて行かれる氏の業績に敬意を表したい。

宋代ものでは、宋代弓箭手口による熙河路の農地開發を詳細に明かにした河原由郎氏、「熙寧年間に於ける熙河路の農地開發について」があり又金國侵入とその復舊對策として、南宋が荒田開發の爲に採つた就耕者負擔減免制度である課子制についての、山内正博氏、「南宋の課子」がある。

最後に、竹岡勝也、楠本正繼、目加田誠、鈴木正、島尾敏雄、庄野潤三氏等諸氏の「重松先生の憶い出」が収録されていて、先生の醫咳に接したことのない者にも、先生の人をがらを髣髴せしめ、先生を圍む研究室の空氣を感じ、九大東洋史の學風と、どうしてかゝる記念論叢が出来上つたかを知らしめられ、滿腔の敬意と祝意を表する次第である。（善峰憲雄）